「さがしものは何ですか」

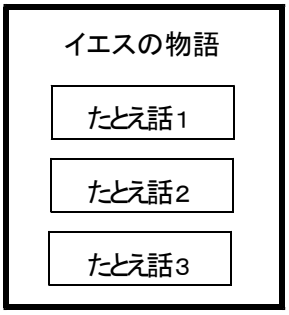
（ルカ15：1～10）

挽地茂男

2019.6.30　日本基督教団千歳丘教会

さて、イエス・キリストはたくさんのたとえ話を語られたました。「たとえ話」と日本語に訳されておりますギリシア語「パラボレー」παραβολή は、元々（παρά＋βάλλω）「わき〔そば〕に投げる」とか「わきにおく」という意味で、教えるために、一つの話にもう一つ別の話をそばに置く、つまり例話としてもう一つの話を添えることによって、メッセージをよりよく伝えようとするお話のことであります。これがイエス・キリストがたとえ話を多く用いて語られた理由の一つであります。しかしギリシア語「パラボレー」のもとのアラム語で「たとえ話」を意味する「マーシャール」は、「謎かけ」という意味もありますので、「たとえ話」は分かり易く説明すると同時に、聞き手が注意深く聞いていないと、メッセージの真の意味を隠してしまうような効果をはたすこともあるのです。

今日はルカによる福音書の１５章の最初の二つのたとえ話を読みますが、このあと１５章にはあの有名な「放蕩息子のたとえ」も出てまいりまして、合計三つのたとえ話が連続して配置されています。この三つとも、一つのメッセージを説明するために使われています。そのメッセージが何であるかは、実際に、三つのたとえを外してみますと、話の本筋〔地の部分〕が見えてまいりますので、直ぐに判ります。１５章の１－３２節の全体から「放蕩息子のたとえ」を含めた三つのたとえを外して



ルカ15:1-32
たとえ話1　v. 4－6
「見失った羊」のたとえ
たとえ話2　v. 8－9
「無くした銀貨」のたとえ
たとえ話3　v. 11－32
「放蕩息子」のたとえ

みますと、１－３節、７節、１０節が残ります。その部分が福音書の話の本筋〔地の部分〕で、直接的なメッセージを語る部分です。

その部分をもう一度読んでみます。１－３節。「15:1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。15:2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者た

ちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。15:3 そこで、イエスは次のたとえを話された。」そして、４－６節で「見失った羊」のたとえが語られます。羊飼いが九十九匹の羊を残して無くした一匹の羊を捜し回り、見つけた羊をつれかえって、友達や近所の人々を呼んで、一緒に喜ぶだろう、というわけです。

そしてその後に、話の本筋〔地の部分〕の７節が続きます。「15:7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」次いで８－９節で「無くした銀貨」のたとえが語られます。女が無くした銀貨を家捜しして見つけたとしたら、友達や近所の女たちを呼んで共に喜ぶだろう、というわけです。そして話の本筋〔地の部分〕の１０節が続きます。「15:10 言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」そして――今日は読みませんが――この後の１１－３２節で「放蕩息子」のたとえが語られます。父親は、死んだかもしれないと思っていた、失った息子の帰還を祝宴を開いて喜ぶのです。赦しの祝宴です。

　たとえ話は、3つとも同じ「失われたもの」が「見つかる」というテーマです。たとえは失われたものを発見し取り戻すことによって、人はどれほど喜ぶものかを示す三つの具体的な事例を提示します。「失われた羊」「失われた銀貨」「失われた息子」。失われたものが見出されます。１５章の三つのたとえ話は、この箇所が伝えるメッセージをより分かり易く説明し、そのメッセージを補強するために使われています。話の本筋のわきに置かれています。

そのメッセージを語る話の本筋〔地の部分〕である７節と１０節をもう一度、見ておきましょう。７節。「15:7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」そして１０節。「15:10 言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」「失われていた罪人」が「失われた羊」や「失われた銀貨」や「失われた息子」のように再び「見出される」ことの大切さと喜び。つまり、一人の人が悔い改めることの大切さ、それによってもたらされる喜びが語られているのです。このメッセージを説明するために、たとえ話を添えるのです。しかもたとえ話は三つも使われています。それは、このテーマがとても大切なテーマだからです。実際、このテーマはルカ福音書の中心的なテーマなのです。

さて、この物語から三つのたとえを外して残った話の本筋〔地の部分〕を、ふつう新約聖書学では「枠物語」と呼んでいます。ルカによる福音書では、特に、額縁の中に絵をはめ込むように、「枠物語」の枠の中に「たとえ話」を嵌（は）め込むという手法が多く使われます。これは、ルカ福音書に特徴的な手法なのです。たとえば１０章の「善きサマリア人」のたとえでは、イエスと律法の専門家の「神への愛と人への愛」の問答の枠物語の中に嵌め込まれていますし、７章にでてくるイエス・キリストの足を涙でぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、口づけをして、香油を塗った「罪の女」のお話の中には、それを枠として、「金貸しが５０デナリと５００デナリの借金をしている二人の負債者の借金を帳消しにする」というたとえが嵌め込まれています。

ルカ福音書の記事がこのような構造を取っているとき、「枠物語」と「たとえ話」とが相互に説明し合う関係に置かれています。それは蛍光灯のグロー球――今はほとんど使わなくなりましたがそのグ

ロー球――と蛍光灯本体の関係に似ています。グロー球に光が入りますと、蛍光灯全体に、パチ・パチ・パチッと光が灯ります。それと同じように、たとえ話の意味が分かりますと、物語全体の意味が分かってまいります。逆に、枠物語に光が灯って、たとえを含む全体に光が灯る、意味がはっきりしてくるということもあります。枠物語とたとえ話は相互に説明的な関係にあるのです。今日の聖書の箇所も、同じような物語の構造を持っていて、全体の意味も非常にはっきりしております。その意味とは、もちろん先ほど見ましたように、「悔い改め」の大切さと喜びということであります。聖書のいう悔い改めつまりギリシア語の「メタノイア」（μετάνοια）という言葉は、基本的に方向転換という意味合いを持つ言葉であります。神なき者から神と共に生きるものへと向かう方向転換を聖書は「悔い改め」と呼ぶのです。〔悔い改めについては「放蕩息子」の譬えを読むときに、もう少し詳しく説明いたします。〕

「悔い改め」が大切なことは説明を受けなくても分かり切ったことですが、それなのに、主イエスは、どうしてたとえ話を三つも使って念入りに説明しなければならなかったのでしょうか。そのいきさつをもう一度確認しておきましょう。１－３節の話の本筋〔地の部分〕です。「15:1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。15:2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。15:3 そこで、イエスは次のたとえを話された。」ファリサイ派の人々や律法学者たちが文句を言い出したからです。「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている。」この批判に対して主イエスは、たとえ話を三つも使って「悔い改め」の大

切さと喜びとを説明されたのです。主イエスとの会食は、その悔い改めがもたらす喜びの表現の一つなのです。しかしファリサイ派の人々や律法学者たちには、主イエスがしていることは、大切なことでも、喜ばしいことでも、意味深いことでも、価値あることでもなかったのです。ただただ汚らわしいことだったのです。

この場面をもう少し整理してみましょう。ここには、大きく二種類の人々が登場します。一つは①「徴税人や罪人」（１節）と呼ばれている人々です。もう一方は、②イエスの行動に不平を鳴らす「ファリサイ派の人々や律法学者たち」（２節）です。１節ａには「徴税人や罪人が皆」（πάντες οἱ τελῶναι καὶ οἱ ἁμαρτωλοι）と出てきますが、もう少し直訳的（ストレート）に訳しますと「すべての徴税人や罪人が、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た」となり、ルカが誇張して書いていることがわかります。「すべての徴税人や罪人が」とルカが書いているのは、彼ら〔徴税人や罪人〕を受け入れるところが、イエス・キリストの所にしかないことを強調するためです。

もう一方のファリサイ〔パリサイ〕派の人々や律法学者たち（２節）とは、イスラエルの宗教的伝統を堅く守ってきた敬虔派（敬虔主義者）の流れをくむ人々です。彼らは、異教的な習慣や律法から逸脱する行為や人々と、一線を画し、自らを分離し、明確に区別する強い分離意識を持った人々だったのです。ファリサイ〔パリサイ〕派という呼び名は直訳すると「分離派」という意味です。彼らは、宗教的純潔（正しさ）に生きた人々なのであります。宗教的道徳に関して、当時の社会では、一種の標準となっていた尊敬すべき、ある種の正しい人々であります。ファリサイ派の人々と律法学者は「この人（イエス・キリスト）は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」とイエス・キリストが罪人と接触することを非難しています。しかし主イエスは、彼らのその律法主義や形式主義（つま

り彼らの正しさ)こそが人々を差別することによって、人々を苦しめていること見て取ります。どのような職業の者であれ、いかなる過去をもった人であっても、神に立ち返る人を神はありのまま受け入れ、むしろ喜んで受け入れてくださる、と主イエスは教えたのでした。「子よ、あなたの罪は赦される」(マコ2:5)。ファリサイ派の人々や律法学者たちにとっては、今や、律法から逸脱しているのは「徴税人や罪人」たちだけでなく、主イエス本人も逸脱者なのです。

二種類の人々が衝突している様が、ルカの文章から見て取れます。しかしわたしたちは、ファリサイ派の人々と律法学者を、即座に、悪玉とすることには少し留保が必要です。7節の「言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」というイエス・キリストの言葉では、ファリサイ派の人々および律法学者に対する徴税人および罪人の対比が、「九十九人の正しい人と悔い改める一人の罪人」の対比として説明されています。「ちょっと待った！」みなさんは、ファリサイ人や律法学者は「正しい人々ではない」とおっしゃるかもしれません。それは皆さんが、聖書的なアングルから彼らを見ているからです。しかし当時の、平均的な真面目に日常を生活している一般市民から見れば、むしろ反対に、彼らはある意味で「正しい人」だと言わなければなりません。イエス・キリストの時代、ユダヤ教倫理に従順であった彼らは、当時の社会では正しい人の代表です。使徒パウロでさえ、自分がファリサイ人であって「律法の義については非のうちどころのない者でした」と誇っているくらいです（フィリピ3:6)。律法の遵守は、律法に従順に生きることは――またそれにある種の自負を持つことさえ――間違ったことでも傲慢なことでもなかったのです。当時はむしろ、正しいことなのです。ユダヤ

人社会において、彼らは正しく生きようとし、生きている人々だったのです。ですからこの物語に描かれる衝突は――ルカ福音書に出てくるファリサイ派や律法学者との衝突を描く他の記事でも同じことがいえますが――イエス・キリストと徴税人や罪人からなる善玉グループとファリサイ派の人々と律法学者という非常に底意地の悪い悪玉グループの衝突ではないのです。徴税人や罪人が当時の社会の標準から言えばやはり問題ある人々であり、罪を指摘される人々であることが認識され、そしてファリサイ派の人々と律法学者が当時の標準に照らして正しい人々だと認識されたとき、ルカ福音書に記されるファリサイ派や律法学者と主イエス・キリストの対立の意味が見えてきます。しかし「神の前には、罪人と呼ばれる人々の罪の深さも、ファリサイ派や律法学者の正しさもあまり変わりがなく、どちらも神の清さの前では薄汚れた罪人に過ぎない」と仰るかも知れません。しかし、両者をグレー・ゾーンに置いて、両者の汚れも清さも、五十歩百歩であると考えると、この話の大切な意味が見えなくなるのです。正しい人が正しいとされ、罪人が罪人とされるとき、イエス・キリストの立っている位置が革命的な位置であることが判るのです。イエスは罪人の側に立っているのです。ここが、キリスト教の位置なのです。ですからこの物語で衝突しているのは、善玉vs悪玉ではないのです。ここでは、二つの生き方(のリアリティ)が衝突しているのです。一方は(1)正しい基準に従って、自分を律して、その正しさを貫徹しようとする生き方(のリアリティ)です。わたしたちは、この正しさを小馬鹿にするようなことがあってはいけません。なぜなら少しでも正しく生きようとする人は、正しく生きることがたやすいことではないことを知っているからです。(2)もう一方の生き方は、たとえ話が示しています。今日の二つのたとえ話を見てみましょう。

ひとつめは「見失った羊」(失われた羊)のたとえ（４－６節）です。次のように書かれていました。

15:4「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を

見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。15:5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、15:6 家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。

失われた羊とは誰でしょう。罪に沈むすべての人です。捜している羊飼いとは誰でしょうか。捜している神です。創世記３章８－９節には「…〔罪を犯した後〕人とその妻とは主なる神の顔を避けて、園の木の間に身を隠した。主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』」と書かれています。この『あなたはどこにいるのか』という言葉は、今も響いています。神は捜しているのです。信仰とは何でしょうか。捜している神を、心を開いて受け入れることです。悔い改めとは何でしょうか。捜している神に向きを変えることです。そこには、赦しが待っています。放蕩息子の父親のように、神はすでに待っておられるのです。赦しは和解の力です。赦しによって愛が可能となるからです。赦しは、罰の赦免に留まらず、隔たれた二者を再結合するものなのです。「見失われた羊」は捜している羊飼いと再び一つになるのです。人は再び、神と共に生き始めるのです。

もう一つのたとえ、「無くした銀貨」のたとえ（8-10節）を見てみましょう。次のように書かれていました。

15:8 「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。15:9 そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。

捜している女とは誰でしょう。

ドラクメ銀貨

レンブラント「放蕩息子の帰還」

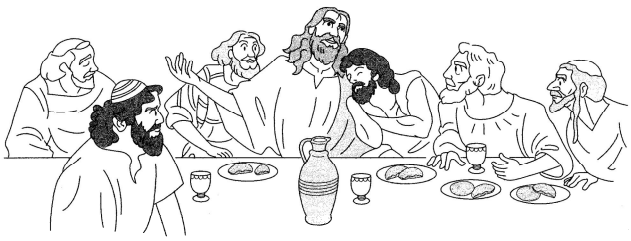
捜している神の象徴です。信仰とは何でしょう。捜している神を、心を開いて受け入れることです。悔い改めとは何でしょうか。捜しておられる神に向きを変えることです。そこには、赦しが待っています。放蕩息子の父親のように、神はすでに待っておられるのです。赦しは和解の力です。罰の赦免ではなく、罪によって隔たれた二者を再結合するものなのです。「無くした銀貨」が、捜している女と再び一つになるのです。その時、初めて、「銀貨」は本来の有用性を取り戻すのです。人は再び、神と共に生き始めるのです。

つまりこの二つのたとえが示しているもう一つの生き方（のリアリティ）とは、神の和解の愛の中に生きる生き方のことなのです。神との和解について、コリントの信徒への手紙二５：１７－２０の言葉をもう一度、さらに一節加えた形で読んでみましょう。

5:17 だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。
5:18 これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。
5:19 すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。
5:20 こういうわけで、私たちはキリストの使節（ambassador）なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。
5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされまし

た。それは、私たちが、この方にあって、神の義〔神との正しい関係を持つ者〕となるためです。

　主イエス・キリストと徴税人や罪人の食事は、その救いと和解の象徴なのです。そこには赦しがあり、喜びがあり、愛があります。



わたしたちが与る聖餐式も、神の救いと和解を象徴する食事です。放蕩息子の父親が備えたように、それは父なる神が備えてくださった赦しの食事です。わたしたちが聖餐に与るとき、十字架で砕かれた主のからだと流された血は、わたしたちを深い罪の赦しの中に包み込みます。たとえわたしたちがそれを感情的に十分に自覚できていなくてもです。そして主の十字架を記念することによって、ますます主の愛を知り、その愛を体現する人になっていくのです。新しい一週間も、主と共に歩んでまいりましょう。祈ります。

2019.6.30　日本基督教団千歳丘教会

15:1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。
15:2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。
15:3 そこで、イエスは次のたとえを話された。
15:4「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。
15:5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、
15:6 家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。
15:7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」
15:8 「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。
15:9 そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。
15:10 言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

15·1 Ἦσαν δὲ αὐτῷ ἐγγίζοντες πάντες οἱ τελῶναι καὶ οἱ ἁμαρτωλοὶ ἀκούειν αὐτοῦ.
15·2 καὶ διεγόγγυζον οἵ τε Φαρισαῖοι καὶ οἱ γραμματεῖς λέγοντες ὅτι Οὗτος ἁμαρτωλοὺς προσδέχεται καὶ συνεσθίει αὐτοῖς.
15·3 ειδὲ πρὸς αὐτοὺς τὴν παραβολὴν ταύτην λέγων,
15·4 Τίς ἄνθρωπος ἐξ ὑμῶν ἔχων ἑκατὸν πρόβατα καὶ ἀπολέσας ἐξ αὐτῶν ἓν οὐ καταλείπει τὰ ἐνενήκοντα ἐννέα ἐν τῇ ἐρήμῳ καὶ πορεύεται ἐπὶ τὸ ἀπολωλὸς ἕως εὕρῃ αὐτό;
15·5 καὶ εὑρὼν ἐπιτίθησιν ἐπὶ τοὺς ὤμους αὐτοῦ χαίρων΄
15·6 καὶ ἐλθὼν εἰς τὸν οισυγκαλεῖ τοὺς φίλους καὶ τοὺς γείτονας λέγων αὐτοῖς, Συγχάρητέ μοι, ὅτι εὗρον τὸ πρόβατόν μου τὸ ἀπολωλός.
15·7 λέγω ὑμῖν ὅτι οὕτως χαρὰ ἐν τῷ οὐρανῷ ἔσται ἐπὶ ἑνὶ ἁμαρτωλῷ μετανοοῦντι ἢ ἐπὶ ἐνενήκοντα ἐννέα δικαίοις οἵτινες οὐ χρείαν ἔχουσιν μετανοίας.
15·8 Ἢ τίς γυνὴ δραχμὰς ἔχουσα δέκα ἐὰν ἀπολέσῃ δραχμὴν μίαν, οὐχὶ ἅπτει λύχνον καὶ σαροῖ τὴν οἰκίαν καὶ ζητεῖ ἐπιμελῶς ἕως οὗ εὕρῃ;
15·9 καὶ εὑροῦσα συγκαλεῖ τὰς φίλας καὶ γείτονας λέγουσα, Συγχάρητέ μοι, ὅτι εὗρον τὴν δραχμὴν ἣν ἀπώλεσα.
15·10 οὕτως, λέγω ὑμῖν, γίνεται χαρὰ ἐνώπιον τῶν ἀγγέλων τοῦ θεοῦ ἐπὶ ἑνὶ ἁμαρτωλῷ μετανοοῦντι.